

幻の少女を探して

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像（2）

松岡 勲

着かなかった手紙

私の手元には先方に着かなかった手紙がある。私が送った手紙の相手は河上孝子さんでした。その手紙に次の様に書きました。

「河上さんと御連絡をお取りしたいと思いましたが、同封した資料にありますように、実は一九五八年（昭和三十三年）に大阪府と遺族会が行いました靖国神社遺児参拝に私も河上さんも参加していました、昨年の六月に遺児参拝文集「靖国の父を訪ねて（第一二集）」が自宅の本棚から出てき、河上さんの文章を発見したからでした。現在、私は靖国神社合祀取消訴訟の原告でもあり、当時同様の遺児参拝が全国的に行われていたことに疑問を持ち、その意図するものを明らかにしたく、その歴史的事実を調べてきました。」

「河上さんの文書を見つけました時の驚きは大変大きなものでした。あの時代に一五歳という年齢であのような透徹した靖国神社遺児参拝批判の文章を書かれた方が、それも

私と同年齢の方がおられたのだという驚きです。当時参拝した私もふくめた多くの遺児達は「英霊としての父の死の意味づけ」を国家（行政）と靖国神社にすりこまれていたしたが、河上さんはその「国家の嘘」を見破られていたのだと感嘆しました。それ以来、一度お目にかかり、当時のこととそれ以降の河上さんの歩みを色々とお伺いしたいと思ってきました。」

ここで言及しました靖国神社遺児参拝文集「靖国の父を訪ねて（第一二集）」（一九五九年三月二〇日、財団法人大阪府遺族会発行）の河上孝子さんの文章を見てみます。（彼女の文章全体は資料・文集を参照ください。）

最初、靖国神社参拝前日の区役所での区長の激励の辞に対して、彼女は根源的な批判を書いています。

「犠牲は美しい行為である。しかしそこに意志が偽って初めて美しいと言えるのであって、犠牲の気持ち無くして死んでいった者に、結果からみて犠牲の名で呼ぶのはかえって侮辱になりはしないか。父は召集令状、赤紙一枚によって操

り人形と化され、別れたくもない親、妻子、知人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の美名のもとに死をも命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも、目出たい事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ。」

また、参拝当日の靖国神社本殿での神主の話に対しても、決して動揺することなく、父の死が英霊として意味づけられることを拒絶していました。

『もう沢山』と叫びたいのを押えながら、すすり泣きの聞える中を、私は終わりまで神主さんの顔を凝視してやめなかった。『寒い凍れるような雪の中、夏は太陽の下で国の為に雄々しく戦い死んでいかれたあなたの方のお父さま』。何と白々しい意志を持たぬ言葉だ。この飾りたてられた言葉が、幾千人の遺族に向って語られたことか。おそらく神主さんの頭の中にその文章は暗記され、明確に覚えこまれていることと思う。明日も明後日も、遺族に向かって語られるだろう。私はそんな安っぽい話など聞きたくはない。私にとって父の死は、もともとと厳粛な、そして寂しさと恐しさを持つて存在するのだ。私の体の二分の一は父によって形造られたのだ。神主さんの話にすすり上げた人達は、話の何処に心ひかれたのか、私には理解し難い。本殿を下りながら、初めて私は悲しい気持ちになったのだ。このような反問の連続と、もろもろの感情を私に与えて靖国神社参拝は終わった。」

この文章を読んだとき、五〇年以上も前に中学校三年生でこれだけの文章を書いた人がいたことに何よりも驚きました。この時

の靖国神社遺児参拝参加者は九七五人で、そのうち八二五人が感想文を書いています。彼女の文章は同世代の文章群のなかで飛び抜けて鋭い視点で書かれています。それと較べれば、私の文章なんかは主催した行政や遺族会の期待に応えるものでした。私の感想文のタイトルはそのものずばり「もう一度行こう靖国へ」となっています。それは靖国神社本殿での宮司の言葉を記録しています。「この靖国神社は、お国のためになくなられたあなたの方のお父さんや、お兄さんの英霊がお祀りしてあります。此国がある限り、あなたの方のお父さんの名は後々まで残るでありましょう。

今日も大きくなられた人々が『お父さん、こんなに大きくなりました。』と報告にいられています。皆さんも、もう一度やつて来て下さい。」と宮司は話をし、それを受けて、「私はなんとなく父は立派な死に方をしたんだなあと思った。」「そうではないか、現在色々な人が馬鹿な死に方をしている。それと違って父の名は後の世まで、この本殿とともに残るではないか。」と書いています。戦死した父の「死の意味づけ」を求める子どもの気持ちをこのように戦後も靖国神社は利用し続けてきたのだと思います。なぜ、当時の同世代の私たちと違い、彼女はこうしてこのような文章を書いたのだろうか、彼女はどんな人だったのだろうか、当時の彼女の思いはどのようなものだったのだろうか、どのような家族と暮らしていたのだろうか、その後、彼女はどのような人生を歩んで来たのだろうか、疑問が大きくなってきました。ぜひ彼女に会って、話を聞いてみたいという気持ちが強くなってきました。私のなかで彼女への憧憬が日ごとに大きくなってきました。こうした気持ちに動かされて、私の「幻の少女」探しが始まりました。

幻の少女を探す

彼女の手がかりは出身中学校が「大阪市立夕陽丘中学校」で、今の時代には考えられないことですが（現在では個人情報保護を理由に住所等は表記されていないのが普通です）、当時の文集には作者の住所表示がありました。彼女の住所は「天王寺区堂ヶ芝町三四」でした。しかし、現在の町名は同じ堂ヶ芝町でも「二丁目」「二丁目」になっており、旧番地のままではありません。それで、大阪府立中之島図書館に当時の「住宅地図」があることを知り、その「昭和三五年版」「昭和四一年版」などを調べました。地図には「堂ヶ芝町三四」の表示の箇所がありました。しかし、「河上」の名前がありません。これには困りました。

そこで、二月九日の午後、土地勘のある大阪市天王寺区桃谷に住の友人であるミュージシャンの趙博さんにつきあってもらい、桃谷近辺を調べることにしました。彼女の住んでいた場所は「住宅地図」では環状線桃谷駅のすぐ前あたりのようでした。しかし、二人で半日彼女の消息を訪ね歩いたのですが、桃谷界隈はビルディングなどが立ち並び、一九五〇年代頃とはまったく様変わりし、彼女が住んでいた場所が見つかりませんでした。（その後、二月一四日に私だけでもう一度現地を訪ねましたが、その一角は昼間に活動する会社や商店が主で、住民は二所帯だけで、住民の方は「自治会当番は年ごとに交代で大変」とこぼしておられ、「昔のことはよく分からない」とのことでした。）

困り果てて、彼女が卒業した大阪市立夕陽丘中学校を藁をもつかむ思いで訪ねました。中学校では教頭さんが懇切に対応してく

ださり、「夕陽丘中学校同窓会」につないでいただきました。同窓会会長さんの紹介で、やがて彼女と同期の同窓会（一九五九年三月卒業、第一〇期）幹事さんと四人もの会員さんに連絡がつくことになり、大変親身になって、相談にのっていただきました。（最初に引用した手紙は同窓会に言づけたものでした。）

同窓会の幹事さんに同窓会名簿に当たってもらいましたが、「平成一六年の同窓会名簿」で彼女は「逝去」とあり、それ以前に亡くなられていることが分かりました。僕が合祀取消訴訟に参加する前にすでに彼女は亡くなっていたのです。そのことを知って大変落胆しました。

その後、同期の松室八郎さんと連絡ができました。松室さんとの電話での話では、夕陽丘中学校卒業後の十数年後に第一回の同期会を行ったが、その時にすでに「逝去」との引き継ぎがあったとのことですから、彼女は二〇歳代後半に亡くなっていたのだろうと想像できました。しかし、いつ頃亡くなられたのか、病氣だったのか、不慮の事故だったのか、それ以外の理由だったのか、まったく分かりません。また、松室さんからは貴重な「卒業記念アルバム 第一〇期 大阪市立夕陽丘中学校」（写真1）をお借りすることができました。その後、五月二五日に松室さんと直接お会いでき、彼女の写真を確認できました。（写真2）さらに「靖国文集（第一二集）」の彼女の写真も確認できました。（写真3）

松室さんとお話ししたなかで分かったことは、彼女の住んでいた場所は「ひさや」という旅館でした。当時の「住宅地図」の「堂ヶ芝町三四」に旅館が確認できます。親御さんが旅館を経営されていたのか、そこで働いておられたのか詳しいことは分かりませんでした。彼女についての松室さんの記憶は「とてもしっかりし

ていたが、どこか暗く、友達との関係はうすかった」とのことでした。（同窓会の元幹事さんが、彼女のことを「先生にもはっきり意見を言うしつかりした子で、私なんか足下にも及ばなかった」と電話で話されたのを思い出しました。）私には、どこか孤立した孤高な姿が思い浮かびました。なお、当時の夕陽丘中学校は市内有数の有名校で、「越境校」でした。当時の生徒は近鉄沿線の奈良、八尾方面から越境通学していたそうで、一学年七〇〇名の生徒数で、現在天王寺区に住む同期の同窓生数は一〇〇人程度しかないとは、同窓会元幹事さんの話でした。環状線を挟んで、その内側に夕陽丘中学校校区の高級住宅地、外側に在日韓国・朝鮮人の集住地があるという社会環境を背景に彼女は育ったのであろうと想像できます。

彼女の弟さんを探す

松室さんと直接お会いする前に電話でお話を聞いて驚いたのは、彼女には弟さんがいたことでした。弟さんは彼女と同年で、姓はちがい「河野S」さんでした。事情は分かりませんが、河上さんのお母さんと河野さんのお父さんが同居され、それぞれ連れ子であったのかも知れません。そこには戦後の複雑な社会事情が垣間見られます。

弟さんがおられることを知り、希望がわいてきました。もし、弟さんが健在で、お会いすることができれば、お姉さんがどんな方だったのか、中学校卒業後、どのように生きておられたのか、どのような事情で若くして亡くなられたのかが分かるだろうから

です。

それで、弟さんを探そうと決心し、幹事さんに同窓会名簿から連絡先を探して欲しいと依頼しました。二月二日の朝に連絡があり、住所が「奈良市四条大路一四一五二」のマンションの五階であり、電話番号も分かりました。それで、すぐに電話しましたが、留守電話になっていました。また、元幹事さんからも電話があり、「その連絡先は二〇〇四年から二〇〇五年の間に転居したようで、同窓会の会報が不配で帰ってきている」とのことでした。

これであきらめようかと一時思ったのですが、その住所の近鉄の新大宮駅近くまで行く決心しました。二月二五日に現地に行き、当のマンションまで確認できました。マンションの管理人さんに尋ねたのですが、七年も前のことだし、管理会社も変わっているので弟さんの転居先は分からないということでした。近所にも聞こうとしたのですが、昨年、前の道路が二車線から四車線に拡張され、立ち退きであたりは変貌しており、昔からの住民の家は見当たりませんでした。それで、その日はあきらめて帰りました。

帰りの車中で、人探しの「素人」であるをつくづく反省しました。なぜかというところ、そのマンションは今風の機密性の高いものではなさそうでしたので、河野さんが住んでいた五階に上がって住民に聞けば、何か分かったかも知れません。それで思い直して、翌日にもう一度マンションを訪ねました。マンションに到着しましたら、管理人室は閉まっていた、これを幸いに五階に上がり、インターホンを押して「以前に河野さんという方が住んでおられたことをご存じありませんか？」と聞いて回りました。マンションは不在が多く、数件応答がありましたが、全く知らないとい

いう返事でした。しかし、幸いなことに河野さんを知っている奥さんが一人出てこれられ、話に応じてくださいました。

河野さんは子どもさんが二人おられたようでした。七年ほど前に引越され、引越先は奈良市内と聞いているが、このマンションでは引越の挨拶はしないから、詳しいことは分からないとのことでした。弟さんは生きておられ、奈良市内におられるようです。（先に奈良県と大阪市の電話番号簿を大阪府立中之島図書館で調べましたが、「河野S」という名前は一人もありませんでした。）その後、松室さんからお借りした卒業アルバムで弟さんの写真が分かりました。（写真4）松室さんの話では、「僕は『わる』だった」けれども、「河野君は『大変まじめ』だった」とのことです。河野さんには大変親しい友人がおられたのですが、三年前に亡くなられたとのことでした。「彼がいたら河野君の所在はすぐ分かったであろうに」とのことでした。「もう三年早かったらな！」とおっしゃっていました。

私の旅は続きます

この原稿を書く前に、私は堀川恵子著『裁かれた命 死刑囚から届いた手紙』（講談社）を読みました。一九六六年に東京で主婦殺人事件が起きました。その犯人の二二歳の長谷川武は半年後に死刑判決を受け、五年後に死刑が執行されました。その彼が独房から送った手紙が遺されていました。その手紙は事件を捜査した検事と二審、三審を担当した弁護士に送られていました。当時、検事はその手紙に激しく心を揺さぶられ、

恩赦へと動き出そうとしたほどでした。作者はこの本で事件の経緯、長谷川武の生い立ち、家庭的背景、母子関係などを分析しました。この本は人が人を裁くこととの意味を問うもので、私はこの本を読み、大変感動しました。

特に著者の粘り強い調査に感心しました。著者が調査を開始したときには、長谷川武は勿論その母親も亡くなっておりました。調査は困難を極めました。長谷川武には弟がいまいました。その弟を探し当てたときには、その弟もすでに亡くなっていました。しかし、弟が兄と母とその一族の位牌を残していましたし、弟と懇意にしていた新聞販売店の社長夫妻にも会うことができました。そして、死刑囚長谷川武とその弟、母や父、それぞれにつながる人々の思いがひとつひとつ明らかになっていきます。さらに幼くして他家に養子に出された一番下の弟も探し出します。その弟が処刑された兄の思いを受け止めるまでの感動的なドキュメンタリーでした。著者はその過程を次の様に要約します。

「戦前そして戦後と時代の波にもまれ、それでも必死に生きぬこうとした母親、戦争で片足を奪われて酒に走り短い生涯を閉じた父、位牌になった家族を抱えて放浪した茂、そして独房で罪と罰に向き合い、処刑台に消えた武――」

こうやって取材することさえなければ、もう誰も思い出すこともなく消えていくはずだったひとつの家族の歴史を、ただ一人生き残った弟は受け止めてくれた。」

この本を読むまでは、もう私の「幻の少女」探しはこの二

回目の連載で終わりにしようと考えていました。それは彼女が若くして亡くなっていましたし、最後の希望だった弟さんの消息も分からなかったからです。そのとき、堀川恵子さんの本に出会いました。堀川恵子さんがひとつの家族の歴史を追跡する姿勢に勇気づけられ、一度はあきらめた探索の旅を続けていこうと思い直しました。それで、もう一度、弟さんの河野Sさんを探します。同級生、元担任の先生と弟さんの行方を探索してもらおうように松室さんをお願いしました。もし、

弟さんが見つければ、彼女のこと、彼女の家族の歴史が分かると思います。また、「靖国文集(第二二集)」に夕陽丘中学三年生の二名の方(女性)が文章を書いていますので(そのうち一人は住所が分かっています)、その方を訪ねて、河上さんのことを覚えておられるかどうか、そしてその方にとって靖国神社遺児参拝とは何だったのか、また、参拝は何を残したのかを尋ねてみようと考えています。さらに、同期会の松室さんはフィリピンで父さんが戦死されたと聞きましたので、あらためて同世代の戦争体験(父の戦死に関わる戦後体験)をお伺いしたいと思っています。

また、同期会の幹事さんも同様に父さんが戦死されていると聞いていますので、一度お話を聞きたいと考えています。という事で、これからも「幻の少女」を訪ねる私の旅は続きます。

(二〇一一年六月一六日)

区役所に集合して天王寺公園に行き、知事さんならびに府会議長さんから激励の辞をうけて天王寺駅に、そして五時九分、母に別れて天王寺駅を出発しました。汽車に乗ったとたん、すぐ二人の人とお友達になり、楽しく汽車の旅をすごして、六時五分に品川駅に着きました。直にバスに乗り靖国神社に行きました。五百人ばかりが畳の上にすわり、お園のために尽されたあの大層なお父様に、心の中でお会いして靖国神社参拝を終えました。その後九段金館により、すぐに羽田空港に向いました。長い汽車の旅でみんながつかれ空港へ行くまでの間、少しばかりねました。バスの車掌さんに起され、バスをおり、羽田空港を二時間ばかり見学した後、昼食を食べ、泉岳寺にお参りして暫く帰りました。十二・十三班は福山館と云う大変よい宿に泊りました。夜食を食べながら銀座へ五六人のお友達と行き、東京のいろいろの物を見て旅館へ帰りました。二日目の楽しい一日を終えました。

あくる朝は六時に起き、食事をして九時三十分バスに乗り、十時に国会議事堂へ、約一時間ばかり見学しているうちに、写真でしか見ていない国会議事堂をこの目で初めて見ました。それから郷土選出議員から激励の辞を受け、議員会館で昼食を食べた後、皇居前広場へ行き皇居を拝観し、バスで国会図書館、明治神宮を見学し、浅草上野で下車して参拝ならびに見学をしました。その後清舎に至り夕食を食べた午後八時三十分まで自由時間になり、八時三十分清舎を出発して東京駅へ、バスの中ではみんな歌を歌い、楽しそうにして車掌さんともお別れして東京駅につきました。東京駅には親戚のおじ様が会いに来て下さいました。おじ様ともお別れして、午後十

時に東京を出発して、二日の疲れで汽車の中ではぐっすり休み、六時に目をさまし一時五分までの間を楽しく過ごし、国会と昼食は名古屋と奈良で食べました。天王寺駅に着き、赤間知事さんから「お帰るなさい」とやさしいお言葉をうけ解散しました。母と東京の楽しかった話をしながら、なつかしいわが家につきました。

靖国神社参拝と私の考

天王寺区豊ヶ芝町三四
夕陽丘中学三年 河 上 孝 子

三時半母に伴われて区役所へ行った。何に対してか皆な一様に厳肅な顔で座っている。私も待たれていたが、私のあと四人が来て区長さんの激励の辞が始まった。私達の父は戦争で国の犠牲となった。今日はその父に追々面会に行く、喜ばしい日である。またそうした父を持つ私達の家庭は、日本に誇りうる立派な家庭である。要約するところしたものだ。犠牲は美しい行為である。しかしそこに意志が欠いて初めて美しいと言えるのであって、犠牲の気持無くして死んでいった者に、結果からみて犠牲の名で呼ぶのはかえって侮辱になりはしないか。父は召集令状、赤紙一枚によって操り人形と化され、別れなくもない親、妻、友人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の美名のもとに死を命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも、目出度い事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ。

区長さんの激励の辞は、私にとって腹立たしい気持ちを起させたに

す。激励とはならなかった。天王寺美術館前で知事さんの激励の辞も、区長さんのそれと同じようなものであり、式ばったことが一層私を腹立たしい気持ちにさせた。母はどのような気持ちで二つの激励の辞を聞いたか、車中で皆は修学旅行でもあるかの如く騒いだ。何が嬉しいというのだ。父の死があつて行われた旅行というのに、日頃からの友人を持つうとましさと、腹立たしい気持ちの継続とで、ついで行きかねるものを感じたが、組長を命ぜられた手前仲間に加わった。

翌朝六時頃品川駅下車、宿で入浴、朝食後、目的の靖国神社へ向つた。バスを下りてまづ大きいのに驚いた。特別とかで御魂に最も近いという本殿で参拝を促された。区役所で感じたと同じ厳肅さを面に表して皆が座っている。一様に目を落して。私も異つた意味のものではあるが、厳肅さを味いながら坐っていた。神主さんの話が前日の激励の辞と同じ内容をもつて、抑揚の全然感じられぬ調子で始まった。「もう浪山」と叫びたいのを押えながら、すゝり泣きの聞える中を、私は終りまで神主さんの顔を凝視してやめなかった。「寒い凍れるような雪の中、夏は太陽の下で国のために雄々しく戦い死んでいかれたあなたの方のお父さま」。何と白々しい意志を持たぬ言葉だ。この飾りたてられた言葉が、幾千人の遺族に向つて語られたことか。おそらく神主さんの頭の中にその文章は暗記され、明確に覚えこまれていること、と思う。明日も明後日も、遺族に向つて語られるだろう。私はそんな安っぽい話など聞きたくない。私にとって父の死は、もつとくどい感傷な、そして寂しさと恐ろしさを持つて存在するのだ。私の体の二分の一は父によつて形造られたのだ。

うとくどい感傷な、そして五十六分寝た。

神主さんの話にすゝり上げた人達は、話の何処に心ひかれたのか、私には理解し難い。本殿を下りながら、初めて私は悲しい気持ちになったのだ。このように反問の連続と、もろくろの感情を私に与えて靖国神社参拝は終つた。楽しかったことは一つ知人と銀座を歩いたこととどまる。

水を打った様な静けさの中で

天王寺区大道一ノ〇三
天王寺中学二年 松 本 強 資

ぼくは七月二十九、三十、三十一、一日と、戦死者の遺児で靖国神社参拝と東京見物に行つてきた。二十八日は行く用意に大わらわであつた。さて当の二十九日になつた。三時半に区役所に集り、天王寺区長さんの訓辞を受けた。天王寺区代表の男子はぼくとも六人であつた。その後天王寺美術館前で壮行式が行われた。一班から二十班まであつて約千人はいると思う。ぼくは二班の五十二番だつたが、班長にさせられた。けたましく鳴つた。母少しづつ動いて行く。ちわす時間が長いせい、か、で蒸気機関車と電気機関車よりなめらかな感じがする。はもう早いスピードで青い朝日のがのぼりかける。

から朝までは寝てわかれ

靖国の父を訪れて

才十二集

財団法人 大阪府遺族会

資料：文集

(写真1)

卒業記念
アルバム

才、〇切

大園市立少鷹丘中学校



(写真2) 後列右端が河上孝子さん



(写真4)

後列右端戴帽が河野Sさん



(写真3) 最後列左から2番目が河上孝子さん



才十二班 北、都島、福島、此花、東、西、港、大正、天王寺区遺児代表